

「富山の置き薬（上）」（富山市刊）が発刊される

くすりを文化として捉える地域戦略の一環か

発行：日本置き薬協会 事務局

5月の本号で「薬をコンテンツとする富山市立の展示施設設置計画」をお伝えした。これに関連して「富山の置き薬（上）」が富山市から3月1日に発行されている。（伊藤玄二郎氏編集、かまくら春秋社制作発行、定価2,500円）

展示施設の基本理念は、「富山のくすりの歴史と文化、精神を継承し、薬都の未来を市民とともに創造する＝300年以上続く薬都とやまの歴史と文化、大切にされてきた精神を継承し、『信用三本柱』（商いの信用・くすりの信用・人の信用）が優れた理念であることを踏まえ、これらを軸として薬都とやまに未来像を考え、ともに創造する」としている。

そして基本方針は、「シティブランディング」に、「薬都とやま」のブランドイメージを強化する、また「シビックプライド」に、富山の産業の礎を築いた先人の智恵を学び富山人としての誇りを育む、としている。

こうした基本理念や基本方針を予め提示するべく、展示施設開館前に「富山の置き薬」発刊が企画されたと思われる。

巻頭の「刊行に寄せて」には、「16世紀頃から始まった富山売薬は、300年を超える歴史を持ち、配置薬は現在も活用されています。本書では富山の置き薬にまつわるエッセイを多くの著明人、文化人の皆様からいただきました。置き薬、薬売り、という言葉が富山と密接に結びついて使われていることに改めて気付かされ、この関係がこれからも続いていくことを切に願ってやみません。本書は、先人の英知と努力のあとを辿り、富山の置き薬を知らない世代や全国各地の皆様にも愛読いただきたいと考えております。また、現在の富山の置き薬の担い手や、富山の薬売りの系譜を引き継ぐ皆さんのお手元にも置いていただけたらと考えております」としている。

本書の大部分が、各界の31名による置き薬にまつわるエッセイで構成され、あわせて、富山売薬にまつわる用具と人々、富山市の魅力の紹介記事が掲載されている。

なお、伊藤玄二郎氏は、かまくら春秋社代表取締役で編集者、エッセイスト。

○置き薬をめぐるはなし

梶田隆章	「富山と私」東京大学宇宙線研究所長 ノーベル物理学賞受賞者	1959年生
阿刀田高	「ユニークな庶民文化」 作家	1935年生
羽仁 進	「富山の置き薬に思う」 映画監督 評論家	1928年生
下重暁子	「玉手箱」 作家	1936年生
河村幹夫	「富山の熊の胆は不滅でした」 多摩大学名誉教授	1935年生
関川夏央	「富山の置き薬と1950年代」 作家	1949年生
吉村作治	「私と富山の置き薬」 エジプト考古学者	1943年生
荒川洋治	「木陰の道」 現代詩作家	1949年生

高橋順子	「富山の薬売りが来た町」	詩人	1944年生
高橋三千綱	「君は投資家の探索方」	作家	1948年生
高野公彦	「顔のない旅人」	歌人	1941年生
黒田杏子	「富山の置き薬」	俳人	1938年生
今井通子	「私と富山の置き薬」	登山家、医師	1942年生
坂東真理子	「富山の置き薬」	昭和女子大学理事長兼総長 「女性の品格」 著者	1946年生
三木 卓	「祖父はヘビーユーザー」	詩人、作家	1935年生
山根基世	「富山のくすり」	アナウンサー	1948年生
志茂田景樹	「安心を伝えるニンジャのおじさん」	作家	1940年生
篠 弘	「薬売りの俳人金尾梅の門」	歌人、評論家	1933年生
酒井忠康	「置き薬の方程式」	美術評論家	1941年生
秋 竜山	「薬箱と紙フウセンと」	漫画家	1942年生
重金敦之	「ネットと落語にみる置き薬」	文芸ジャーナリスト	1939年生
出久根達郎	「口が堅い」	作家	1944年生
小林和男	「人情の芳香」	ジャーナリスト	1940年生
小檜山博	「ふるさとの使者」	作家	1937年生
城戸朱里	「旅する薬屋」	詩人	1959年生
新川 和江	「四角い紙風船」	詩人	1929年生
川村二郎	「薬の話」	元週刊朝日編集長	1941年生
池内 了	「置き薬のありがたさ」	宇宙物理学者	1944年生
東 博司	「ポルトガルでの富山の置き薬と邂逅」	前ポルトガル大使	1952年生
柏木孝夫	「富山の薬ビジネスモデル」	東京工業大学特命教授	1946年生
富士川義之	「母と祖母と富山のくすり」	英文学者、文芸評論家	1938年生



○用具資料コレクション

置き薬を届ける人

行商道具

売薬さんのおみやげ 紙風船

製薬用具

売薬さんの進物 売薬版画

富山の売薬版画の魅力 中井敏郎

包装と紙

置き薬を支える人々

売薬商家

富山の置き薬の歴史

富山市の魅力